

## FV（フューチャービジョン）、 Challenge についての説明

長 瀬 正 尚

長瀬：よろしくお願いします。電通の長瀬と申します。音は聞こえていますか。そうしましたら、これからご説明をさせていただきます。

今回、先に結論からお話しさせていただくと、Future Vision と Challenge というものを策定させていただきました。これはもちろん内容も大事なんですけれども、これを紡ぎ出すに至るプロセスの方が、主に電通の役割としては大切だと思っておりますので、こちらの方を順を追ってご説明させていただきます。

今ご覧になっていただいている資料（図 1）が、われわれが最初のプレゼンテーションでお話しさせていただいた簡単なグラフになります。これは何

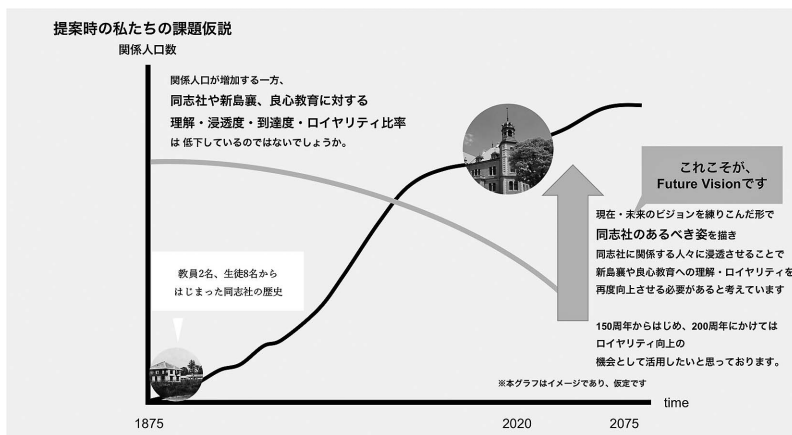


図 1

を示しているかということ、1875年に新島先生によって同志社が設立された時というのは、教職員2名と生徒8名からスタートしているという事実に基づいております。この時、何が起きているかということ、新島先生の教えというものを直接聞いていたとか、教えを受けている生徒という関係性だったので、新島先生がお考えになられていたことが直接浸透して伝わっているという状況の中でした。

これが年数経つとどうなるかということ、新島先生の教えを受ける人間、人口というものはどんどん増えていく一方で、その濃度が下がっていくのではないかということを懸念としてわれわれがご提示させていただきました。

では、このギャップというものをどう埋めればいいのかというのが今回のテーマになっていまして、ここを埋める作業を皆さんと一緒にやっていきましょうというのが電通の提案でございます。

そして、このギャップを埋めていって、また150周年、200周年に向かって、新島先生の教えだったり、お言葉、お考えというものをあらためて現代に沿って解釈していくというものをFuture Visionとしてご提案させていただきました。ですので、今回策定させていただいたFuture Visionは、もともとこういう考えに基づいた形でワークショップを通してつくり出させていただいているものになっています。

では、そのFuture Visionというものに関しては、どういう要因、要素を加えて作っているのかということ、先ほども申し上げました通り新島先生の教え、それから同志社が持ち合わせている主義という部分がベースであって、これに対して未来創造プロジェクトチームの皆さまの個々が持つ思いであったり、考え、それから同志社に対する理想の同志社像というものを加味させていただいております。

それに対して、いわゆる俯瞰的に第三者的な要因、未来がどうなっているんだろうとか、同志社が今世間からどういうふうに見られているんだろうかという外部要因を加えて検討をしていく。そして、これをワークショップという、皆さんと一緒に2日間の作業を通じて作っていくというのが、電通がお手伝いさせていただいた部分になります。

ワークショップを浸透させるに当たって三つのステップを大きく分けさせ

ていただいています。一つは創る。これは Future Vision をプロジェクトチームの皆さんと一緒に創っていきましょうということになります。二つ目、伝える。150 周年に向けて、今回創る、策定していく Future Vision を広く伝えていくということが必要になっていくのかなと。特に、作っただけに終わらないように各種プロモーションだったり、150 周年に向けた取り組みに、この Future Vision というものをいかに織り交ぜていくのかということが一つポイントとして大事になっていくかと思います。

三つ目が、150 周年というのはあくまで通過点であると考えなければいけないと思っていて、150 周年で打ち上げ花火で終わりましたということではなくて、150 が終われば、次、同じチームで考えると 200 が来ます。新島先生も教育の集大成は 200 年後という話もあると思いますので、そういった意味で 150 というのをゴールではなくて通過点に考えた場合に、次に向けてどういうふうアップデートしていくのかというポイントも、この 150 周年では考えるポイントであるかなと思っています。

これが先ほどお伝えした、創る、伝える、次に向けてというものをだいたいグランドデザインとして描かせていただいたものになっています。先ほども申した通りで、創るところがゴールではなくて、その後、伝える、それから次に向けてアップデートしていくところを行っていくということが大事になっていくのかなというものになっています。

実際、その未来創造プロジェクトチームというものはどういう形で行われているかという、先ほど横井先生からもお話がありましたが、基本的には法人内の各学校から有志を募って行っていく。この時、同志社さんに限らずなんですが、われわれがワークショップをやっていく上で大事にしているのは、この選抜されるメンバーが、極めて自分事化ができる人たちであるということが大事かなと思っています。幸い、今年 2 期目の募集でメンバーの皆さま来ていただいておりますが、皆さんすべてがこの取り組みというものを自分事化していただいておりますので、すごくいい会議体、組織体として動かれているのではないかと考えております。

では、今までのバックグラウンドの中でどういうプロセスを経てこの Future Vision だったり、Challenge を策定していたのか。同志社の今出川キ

キャンパスで2日間お集まりいただいて、その2日間で同志社についてずっと考えていただくというワークショップを行ってまいりました。

まず Future Vision を考えるに当たっては、グループを3つに分けて、各グループごとに同志社のありたき姿というものを考えて言語化していただいております。この時は2050年という近未来に同志社がどうあるべきかというのを各グループで話し合っていて導き出しております。この言葉というのを最終的に1つに合体させたものが、これが Future Vision のすべてのベースになっています。Future Vision に関しては、このベースになった言葉をコピーライティングしたり、学内協議を掛けることによって、最終的に今公開させていただいている Future Vision とさせていただいております。

一方で Challenge に関しては、こちらの方が少し難度が高く議論をしていただっていて、グループを3つに分けて、各項目ごとにかなりの量の報告書をまとめています。例えばグループ1に関しては、同志社の今というのはどういうふうに使われているのかというのをトピックスごとに箇条書きにしています。「未来社会における同志社の貢献というのはどういうふうに行けるんだろうか」みたいなところを、こちらも同じように箇条書きにして要点を導き出しています。

さらに、Future Vision に関して同志社のありたき姿はどうなんだろうかというのを同じように出していただいて、そして同志社の今とありたき姿とのギャップというのは実際何があるんだろうかというのを、このワークショップでも出させていただいて、それらのワークショップを経た上で、では、実際同志社は Future Vision を実現するに当たって何をすべきかというのを Challenge としてまとめているとさせていただきます。

いわゆる自由発想で考えているので、もしかしたらこれは難しいんじゃないかみたいな話があるとは思いますが、考えるというのは否定から入らないことが大事だと思いますので、基本的には自由協議で出させていただいております。こういうワークショップを3つのグループすべて、同じような形で検討させていただいて、最終的には各チームごとの報告会という形でメンバーの皆さんに共有させていただきました。

こういうプロセスを経て、今回 Future Vision と Challenge というものを策

定させていただきます。Future Vision はこちらになります。

あたらしい自由の風を、世界へ、未来へ。

聖書は言う、

「真理はあなたたちを自由にする」と。

また、新島襄は言う、

「我が大学の門戸は広く開け、我が大学の空気は自由なり」と。

同志社には自由の志をもつ者が集い、学びの道を切り拓いてきた。

1875 年から今日の今日まで、そしてこれからも。

さあ、自由を学ぼう、つくろう、広げよう。

世界へ、未来へ吹く、あたらしい自由の風になろう。

新島の祈りとともに。

という形で作らせていただいております。

一方で Challenge に関しては、次のとおりです。

**Challenge 1** 良心教育の意味を考える機会を提供する

**Challenge 2** 良心教育を発信し、理解者を増やす

**Challenge 3** 良心教育を共感者とともに時代に合わせて発展させる

**Challenge 4** 同志社の学生・生徒・児童・園児、教職員の交流を促進し、絆を強める

**Challenge 5** 同志社の卒業生とのネットワークを強化する

**Challenge 6** 同志社の輪を世界へより広く繋ぎ、社会に貢献する

Challenge 1、2、3 が良心教育の浸透と拡散・発展をしていこうというポイントで Challenge を作らせていただいている、Challenge 4、5、6 は同志社の繋がりの輪を強化・拡大していくということをポイントとして作らせていただいています。共に 1 と 4、2 と 5、3 と 6 というのがやわらかに対比になっておりまして、数字が広がるたびにステークホルダーを含めた関わる人たちの幅というのが広がっていきます。

なので、例えば Challenge 1、2、3 に関しては、良心教育の意味を考える機会を提供するといういわゆるインナー向けの話から、外に発信して理解者を増やそうというポイントだったり、共感者を作った上で時代と共に発展させるというふうに外への広がり大きくさせるように Challenge を策定させていただいております。

同じように 4、5、6 というのも、まずは学内、そして OB、そして同志社に関わるような社会一般にも広げていこうというポイントで作っています。

今回、そういう形で作らせていただいた Future Vision と Challenge においては、リーフレットを作成して配布させていただいたりとか、150 周年記念事業のホームページの方にもこういう形で記載させていただいております。

今回こういう形で Future Vision を策定させていただきましたので、今後プロモーション等々にも、この Future Vision と Challenge をベースに検討させていただくことが大事かなと思っております。手短でございますが長瀬からの報告は以上とさせていただきます。